【274】

氏　名	西　川　幸　治（にしかわ　こうじ）
学位の種類	工　学　博　士
学位記番号	論　工　博　第 187 号
学位授与の日付	昭和 43 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	**都市構成に関する史的考察**
論文調査委員	（主査）教授 福山敏男　教授 川上　貢　教授 西山卯三

論文内容の要旨

本論文は，都市の発展過程を歴史的に究明し，その構成と機能を明らかにすることによって，現代都市が当面する事態にたいして明確な史的判断を与え，それに立脚して，都市の将来像を構想する適切な展望を得ようとするものである。序章，本論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲおよび結章からなる。

序章では都市の生成過程を，集落から都市への発展にたどり，古代文明の都市について都市としての原初的機能と構成を明らかにしようとし，また中国古代の都市の規範形態が現実に都城制として中国および日本で定着する過程を比較検討し，本論の考察のための前提としている。

本論Ⅰ，「寺内町の形成と展開」では，中世末に都市や集落を運命的共同体として意識し，自衛の態勢をとり，多様な展開をとげた環濠城塞都市の一つとして寺内町をとりあげている。はじめにわが国の寺院と都市の関係についてのべ，続いて寺内町以前から原・寺内町の形式過程をみ，山科や石山で成立した寺内町の展開過程と都市生活を考察し，理想都市「仏法領」の現実都市化として寺内町をとらえ，わが国の理想都市の一形態であるとした。そして寺内町が中世末に建立された真宗寺院を中核とし，社会の重圧を全身に受けながら生き続ける人々の救済を正機とし，その社会的属性を超えて，平等に弥陀の本願に帰する真宗の信仰を共有する宗教的連帯感によって構成された都市で，この精神的共同体を確保し，その生活共同体を維持するために計画的に構成された環濠城塞都市であることを明らかにした。さらに石山戦争の敗退を契機として寺内町が解体し，変容する過程についても論証した。最後にわが国の都市史において寺内町のしめる位置を定めている。

本論Ⅱ「城下町の成立と構成」では，近世における基本的都市である城下町について，その成立過程を，戦国の村落と武士の動き，戦国大名の都市政策のなかでとらえ，城下町が兵農分離・商農分離の政策，城郭の統合，中世の都市や村落の自衛的防禦機能の解体の上に成立したことを明らかにしている。織豊政権を経て幕藩体制によってその完成をみた城下町の建設と構成の特殊性を考察し，都市としての防禦的機能の喪失と身分格式的秩序による居住区域の分離を明らかにし，つぎに城下町の都市生活の展開，そ

れにともなって在郷町を中心とした商工業が「国産振興」という名目で進められ，城下町のもつ機能も大きく変容をせまられ，そして明治の変革によって城下町が完全に解体してしまう過程を論じている。最後に，巨大城下町としての江戸の特殊性を江戸大名居館の構成と家臣団の集団居住としてとらえ，その消費都市としての性格を明らかにしている。

本論Ⅲ「近世都市論の形成と展開」では，近世都市たる城下町は中世の都市的伝統を吸収し固定して成立したことを見，まず戦国武将のもつ都市観を，戦闘に当たって放火し自焼される都市，保護し固定される都市としてとらえている。幕藩体制の都市たる城下町は現実には防禦的性格を喪失しながら，たて前として軍事的性格の強い配置をもつ擬制的軍事都市であり，身分格式的構成を示し，その生活・行動様式が固定され，中世末の生活共同体にみられた連帯感は分断されたとしている。次に近世に成立をみた武士道・軍学のなかに定着された都市像をとりあげ，城下町の性格を明らかにしている。江戸中期以降，都市生活の矛盾が深まるにつれて，その原因の究明と具体的な対策が提示されてくる。それはまず武士の都市生活批判，土着論としてあらわれる。蕃山にはじまり，徂徠によって体系的に究明され，土着の構想が提示された。土着論は徂徠以後もひき続き論じられ，幕末に近づくにつれて，国際的環境のなかで大きく変容したことを明らかにした。一方，土着論が都市生活を否定的にとらえたのに対し，都市生活を肯定的にとらえ，これを享受しようとする思潮が流れていた。それは町衆の伝統をひく光悦や紹益によって主張され，のち梅厳の心学や懐徳堂で都市者的理論ともよぶべきものに成長し，その立場にたつ都市改造論が多様に展開してくる。そのなかには近代都市計画理論の先駆をなすものが少なくなかったことを指摘する。さらに交通の発達による全国的交流，国際的関心の増大，人間的自覚によって本多利明や佐藤信淵らは区区たる幕藩体制を想念のなかで否定し，近代的統一国家を構想するまでに展開したその過程を論じている。

結章は結論と展望とからなる。結論では，本論の考察によって明らかにした日本の都市的伝統の性格を見定め，今後継承し発展させるべき方向を提案している。

展望「保存修景計画」は，以上の成果にわたって，未来の生活空間の中に，歴史的文化遺産をいかに保存し，その活用をはかるべきかを論じ，また歴史的都市をいかに再構成し，再開発をはかるべきかについて，環京都緑地帯構想を提示して検討し，保存修景計画の現代的意義を強調している。

論文審査の結果の要旨

本論文は，かつてない規模をもって都市の構造的改革と高密な都市的生活空間の創造の問題に直面している現代の要請に対して，その解決に向って都市建設を推進する前に明確な展望を得るため，その基礎作業として都市の歴史的発展の過程を研究し，それにもとづき正しい史的判断を下し，都市の将来像を構想する立脚点を樹立することをめざしている。

まず著者は序章で都市のもつ原初的機能と構成を，集落から都市への発展と，古代文明の都市について考察し，生産力の向上にともなう経済的余剰・社会的分業が都市成立の基本的条件であり，建築的には倉庫・市場の成立がこれを表徴していることを明らかにし，かつその地域的条件にしたがって特殊な都市的形態を生じていることを指摘している。また日本の都市の手本となった中国古代の都市的規範形態が，中

国と日本で都城制として発展する過程を比較し，その相違を明らかにしている。

これらを前提として，日本の都市構成の史的考察を進めている。寺内町の形成と展開の章では，中世末に著しく発展した環濠城塞都市の一つとして，理想的都市「仏法領」の出現の過程とその都市生活，王法と仏法の葛藤のなかで展開し，解体し，そして変容をとげた過程を明らかにし，中世末の都市の動きをわが国の都市史のなかに正当に位置づけようとしている。

城下町の成立と構成の章では，城下町の成立過程を考察し，兵農分離，商農分離，城郭の統合，集落や都市の防禦的機能の解体の上にそれが構築されたことを明らかにしている。つぎに城下町の構成を考察し，その身分格式的秩序による閉鎖性，地域空間的分離を明らかにし，城下町の核である城郭がその閉鎖性の故に機能的核とはなりえず，城下町の計画上の矛盾となったことや，また近世中期の商品経済と商工業の発達により，城下町が大きく変容し，解体していく過程を明らかにしている。

近世都市論の形成と展開の章では，まず戦国武将のもった都市観を検討し，次に幕藩体制下の都市の性格と，武士道・軍学に密着した都市像を明らかにした。そして江戸中期以降大きく展開した都市再編成論・都市改造論を検討し，それらが近代的都市計画論の胚芽を多くもつことを指摘し，やがてこれらが近代的統一国家を構成するまでに成長し発展した過程を明らかにしている。

結論として，以上の考察からわが国の都市的伝統を整理し，その特性を指摘し，継承し発展させるべき方向を示している。

展望として付する保存修景計画では，この研究によって得た観点に立ち，未来の生活空間に歴史的文化遺産を保存し，活用をはかり，また歴史的都市を再構成し，再開発すべき方途を具体的に示し，その現時における意義をのべている。

これを要するに本論文は，従来研究されることの少なかった日本の都市発達史の進展をめざし，その考察によってわが国の都市的伝統の特性を明らかにし，さらにその成果に立って歴史的文化遺産に関する保存修景計画の必要とその現代的意義を指摘したものであって，学術上寄与するところが少なくない。

よってこの論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。